「民具名一覧」の課題と今後の展望
――あとがきにかえて――

神野善治

「民具名一覧」は有効か

今回、表明した「民具名一覧」（「全国・民具名称対応表」）と民具の「地域別民具一覧」は、これからの民具研究や民具活用のための有効な手段となりうるだろうか。今回のプロジェクトを終えるにあたり、改めてその有効性と問題点、さらに今後の展望を述べておきたい。

まず、「民具名一覧」の有効性について考える。

「基本民具」の考え方

叢書６［民具名一覧編］（前編）でも検討したように、民具の分野に生物学のような「種の概念」を持ち込むことができないとしても、今回の「民具名一覧」の作成作業を通して、さまざまな分野ごとに「基本民具」と言える民具のタクソン（分類単位）を抽出できる可能性があると思えるようになった。ここで初めて「基本民具」という言葉を用いたが、これまで「基本的な民具」と表現してきたものを、改めてこのように提示してみた。プロジェクトのメンバーがこの表現を意識して抽出作業を行ったわけではないが、主旨としては了解されていたといえるだろう。地域の暮らしのさまざまな場面ごとに伝承されてきた技や知恵が、具体的に示されるときに、用いたり、作り出されたりする、必要欠くべからざる用具類や造形物のことである。これを各分野から抽出する作業が、「民具名一覧」を作成する方法を通して実質的に行われた。衣・食・住の場面や、生産の場面などで、地域では一般に用いられ、同様の機能と形態をもつ一群の民具で、同じ集落や、同業者の仲間などでは、共通する名前で理解されていることが多いものである。今回のプロジェクトでは、期間内に民具の「地域別民具一覧」と全国版の「民具名一覧」の突き合わせ作業を徹底して行うことが叶わなかったが、今後、新たな地域の民具についてのリストを追加しながら、「基本民具」の見方でリストが整備されていけるかどうか、さらなる検討を加えていけるとよいと考えている。

コレクションからの抽出

ただ「基本民具」といえるリストは研究者が机上で行うことも可能かもしれないが、地域や分野別の民具の特性が的確に示せるものができていくためには、今回行なった作業のように、地域ごとに系統的・体系的に収集されている既存の民具コレクションを活用することが有効だと思う。検討対象が特定でき、将来にわたり何度でも実物によって検証することが可能だからだ。生活のさまざまな場面で、伝承的な活動がまだ実際に行われていたときに調査収集され整備されたコレクションが理想的だが、すでに行為としては行なわれなくなった分野でも、伝承とともに体系化されている民具コレクションを再検討することからも、多くの収穫が得られるだろう。その意味で、日本では国の重要有形民俗文化財に指定された民具のコレクションが数多く存在するのが頼もしい。さまざまな視点で地域の特色ある生活の場面の民具が系統的に集められている。現在 200 件以上の指定物件があり、１件に含まれている民具点数の合計を示した数値を見たことがないが、全体で数十万点を優に超えるものになっているだろう。このような膨大な民具が整備されて蓄積されている国を、日本以外には知らない。今回のプロジェクトで検討対象にした民具コレクションは９つに限られているが、それだけでも 3,000 種類余りの項目が抽出されている。この中には同類と考えられる民具が重なっているので、重複分を差し引いても 1,500 ぐらいの「基本民具」といえる種目が浮かびあがってくる。これがほかのすべての指定物件でも検討されれば、実にさまざまな分野の「基本民具」のリストを整えることができるだろう。

地域や分野ごとに「基本民具」が蓄積されていくことで、それらが、地域の生活文化、あるいは分野ごとの日本人の生活文化のあり方を語る有力な手掛かり、前編で河野通明さんが述べている言葉を借りれば「語り部」になりうるだろう。

そして、日本国内だけでなく、世界の国々や諸民族の民具についても同様な手法でリスト化をして「基本民具」を見出す作業ができないだろうか。そのことで具体的なモノを通した文化の相互比較が可能になることが期待される。海外の民具との比較のための展開については、後で別に取り上げたい。

「検索タグ」としての名称

さて、今回のプロジェクトでは、「民具名」のリストを作るという目標を立てて「民具名一覧」の作成を行なったのであるが、そのこと自体に根本的な問題が含まれていたことに気付いて、プロジェクトの推進をしつつも、ずっと考え続け、どう取り組んでいくかを悩み続けた。そして、ようやく最後の段階で、民具ならではの種別（分類単位）の捉え方が可能ではないかという確信が得られるようになってきた。前編の各論でも紹介しているように、「民具名一覧」に示した

「民具名」は、かねてから期待されていたような民具の「標準名」を示したものではない。作業の結果として言えることであるが、分野ごとに抽出された「基本民具」といえるような民具の分類単位を見出し、それを示す名称を探す作業だったのだ。研究対象を明確にするには、それに何らかの標題を付けて、共通認識のもとに比較検討をする必要がある。対象を話題にするときに、誤解が起こりにくく、他の概念と比べたり重ね合わせたりできるように用意された「検索タグ」の役目を果たすものが必要なのだ。どのような範囲にどんな名前を付けるのかは、意見の違いがありうることなので、ひとつずつ関心を持つ者たちが議論を尽くす必要があるが、民具には、まだまだ、ほとんど検討が加えられていない分野がたくさんあり、今回はあくまで分野別、地域別に「基本民具」といえるものが、既存のコレクションや地域の民具研究の中でどれほど確認されているか。それをリスト化することを優先することになった。そこでは、あくまで担当者の見解にまかせて作業を進めていただいた。ここで示した名称とともに、むしろ、ここではどのような対象をいかにまとめて提案しているかという点に注目していただきたい。

ひとつの種類と見なせる民具の分類単位（タクソン）は、生物学の「種」のように互いに厳密な境界線で区切れない極めてファジーなもので、交錯している場合さえあるが、各地のさまざまな分野を成り立たせている「基本民具」は、長年その地域の民具を調査研究してきた民具研究者には、ある程度イメージが特定されているものがあるに違いない。その蓄積に頼りつつ、しかも、地域ごとに実際に残されている既存コレクションから抽出するという作業で「地域別民具一覧」を作る方法は、適切なものだと思えた。

ところが、地域のコレクションから抽出できる地域ごと、分野ごとの「基本民具」といえるような分類単位も、その背景に実は数多くの同類ととらえられる個々の民具があって、それらはあえていえば、個々の民具ごとに、微妙に異なるバリエーションを持っている。しかも、それらに付けられた呼称（方言名）は実に多彩で、字（集落単位）ぐらいに違い、さまざまな呼称が互いに交錯している（この状況については、この文章の後半で、かつて内田武志が残した業績から紹介しているので参考にしていただきたい）。しかし、そのうちから典型となるものをその民具の代表として選ぶことで、イメージの共有をはかることは可能だろう。

これが各地、各分野で提案されたうえで、今度は日本全国の民具について、分野ごとに各地のコレクションから抽出された「基本民具」を束ねて、日本全国の「基本民具」と捉えられる一覧が整備される。そういう手筈を考えたのが今回のプロジェクトだったのである。

「分野別分類」の可能性と限界

民具をどう分類するかも、再検討が必要だった。日本では、かつてアチックミューゼアムが提示した「民具蒐集の手引き」を踏襲して、文化庁が民俗文化財の分類として採用した分類が、各地の博物館や郷土資料館に採用されている。これは、衣・食・住からはじまり、生産・生業、運搬・交易、社会生活、信仰・年中行事などに及ぶもので、いわば生活を場面別にとらえた「分野別分類」だと言える。それぞれの場面で用いられる民具を配列したものである。国の重要有形民俗文化財も、この分類に添って整理されているので、この分類に慣れていれば、目当ての民具がどこにあるか探しやすい。

暮らしの場面を思い浮かべることができる点ではとてもすぐれている分類だが、あえて言うと、融通のきくファジーな分類で、これは利点でもあり欠点にもなっている。たとえば「生産・生業」の下位には、農耕・漁撈・狩猟・畜産などのさまざまな生業や職人の仕事を含めることができ、自然環境や歴史的環境が全くことなる地域で行われている分野が登場すれば、その分類項目を追加することも可能だ。世界中のどこの国でもどの民族でも、それぞれの生活の場面ごとに配置すればよいから、海外での民具分類に適用可能だろう。

分野別分類なので、たとえば漁撈を中心にしたコレクションでは、その中に、海上での仕事着や食事用具、浜辺や港での運搬作業用具などを配置している例をよく見る。つまり下位分類に、上位分類に配置されていたはずの「衣」や「運搬」の民具が混入したり、形態や機能が共通する民具（たとえば台所にある食品用の籠類）とよく似たものが、農耕用にも漁労用にも用いられ、それぞれ別の「〇〇カゴ」などの呼称がついていて、大分類を越境して配置されたりしていることがある。形態と機能が共通する籠などの容器や、刃物類などは、それぞれの分野での目的ごとに繰り返し登場するということを認識しておかなければならないのだ。

「分野別分類」では、さまざまな民具を自らの身辺で使用してきた人たちや、民具研究に精通している博物館の担当者などならば、難なく相応しい分類に位置づけができるかもしれない。しかし、用途や名称が不明の民具について、聞き取り調査などが叶わない場合は、この分類にはあてはめることがでない。すでに収蔵資料の中に同じものがあっても、資料が膨大な場合には、展示物を見渡し、リストやカードの写真などで見当をつけるか、収蔵棚をすべてめぐって同類を探すという作業をせざるをえない。遠隔地の博物館資料、とりわけ収蔵庫に入っている資料から探しだすことは至難の業だ。しかし、新人の学芸員や、民具にこれから関心を持つかもしれない若い世代が、名称や用途ではなく、モノ自体の情報から探索できる手法がどうしても必要となるだろう。

今回の「民具名一覧」のように既存の蓄積から「基本民具」の集成を充実させ、その項目ごとに、モノに関する情報をしっかり書き加えることで、いずれ、モノの情報から逆算する方法で、その膨大な蓄積の中から目当ての民具を探し出し、その実態に迫れる可能性が生まれてくるに違いない。

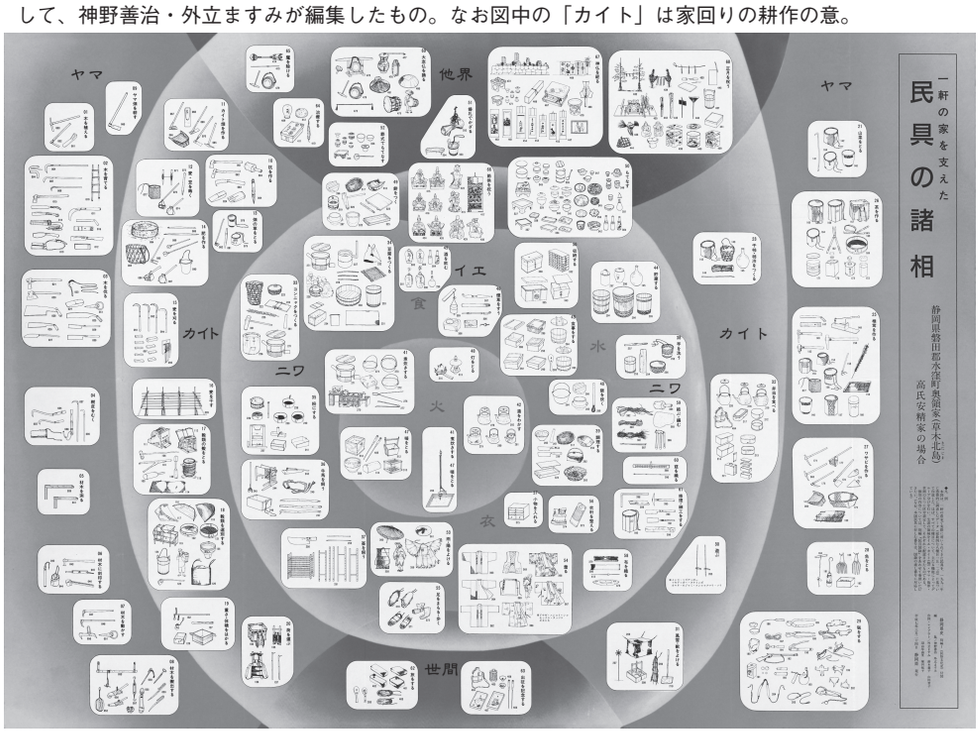
体系的理解の重要性

「分野別分類」の見方で民具コレクションを充実させるには、同じ空間の中で同時に用いられたり、時間経過とともに

一連の流れの中で用いられたりしている民具の組み合わせを徹底して、まるごとセットで調査収集することがとても有意義であることを強調しておきたい。暮らしの技や知恵が、民具を通して目に見えるかたちで、総体として理解できるものとなるからだ。民具だけでなく、それぞれの使用方法や技を捉えた映像記録や、個別の民具にまつわる記憶を同時に残すことも望まれる。このような組み合わせが、さまざまな分野にあって、その要素になる民具の組み合わせ方にも地域や時代を特徴づける典型が認められるだろう。

韓国では一軒の家の現代の暮らしの中で用いられている物質文化（生活財）をまるごと把握しようとする「サリムサリ調査」が国家事業として推進されていることを先に紹介した。日本でも早くから一軒の家の民具を悉皆調査する試みは、宮本常一指導のもとに武蔵野美術大学の研究会などで行われ、民具研究者が育っている。筆者も静岡県水窪町や、東京都三鷹市などで試みてきた。一軒の家、あるいは一連の作業で使われる民具を悉皆調査して、その相互関係を考慮しつつ、一枚のマップに配置することで、全体を体系的に理解できる効果がある。こうした相関図、あるいは「民具まんだら」と言えるようなものを地域ごと、分野ごとの民具で描くことを今後も試みてみたいと思う。

図１　一軒の家の民具（静岡県水窪町）：原図は平成７年刊『静岡県史別編１（民俗文化史）』の付図として、神野善治・外立ますみが編集したもの。なお図中の「カイト」は家回りの耕作の意。



用途・機能と名称の三つ巴の関係

民具の名称に関する研究で、どうしても触れておかなくてはならなかった業績に、内田武志『静岡県方言誌』（昭和15年、アチックミューゼアム）がある。このプロジェクトでも検討対象とすべき文献であったが、ここで内田が示した提言も含めて簡単に紹介する。1,100頁もある大冊の後半の第3輯「民具篇」が575頁を占めている。静岡県という地域を限定しての民具名の調査報告で、紹介されている民具はわずか37項目にすぎないが、実に緻密なものを提示している。そのうち内田が「担ぎ平俵」と命名した民具に注目したい。

これは、俵状の平たい容器で、静岡県内の農家では運搬用や保存用など広く用いられているものである。県内でイジコ、あるいはビクと呼ぶところが多いが、イジコという語もビクの語も、この容器以外のさまざまな形状の容器の呼称としても広く用いられているので、この二つの方言名を、「この道具の標題とするには不適当」として、「この民具の形状や使用法などを考慮して、担ぎ平俵と命名した。当県には担ぎ俵、または平俵と称するところはあるが、これを接続して担ぎ平俵というところは無い。担ぎ俵という名称も良いのであるが、肥料運搬具の項に挙げたごとく、長い縦俵にも称されているので、その混同もあり、また平俵というところも少数あるが、これはこの民具の平たい盥形の意は現れているが、これにその運搬法である天秤棒で担う意をも示してこの両名称を合して、担ぎ平俵と命名した訳である」と命名の由来を丁寧に説明している。要するに方言名は県内を二分する二つの語があるが、ともに別の容器の方言名にもなっているということで、静岡県にかかわらず、民具名としてよく使われる言葉が、さまざまな用途や形状の異なる民具の間で、交錯して用いられる場合がしばしばある。実際に使われている方言を、内田がいう「標題」として採用することができないとして、独自の命名をしたことが語られている。

図２　担ぎ平俵（『静岡県方言誌』より）

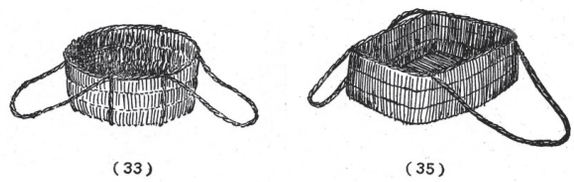


図３　容器の方言分布表

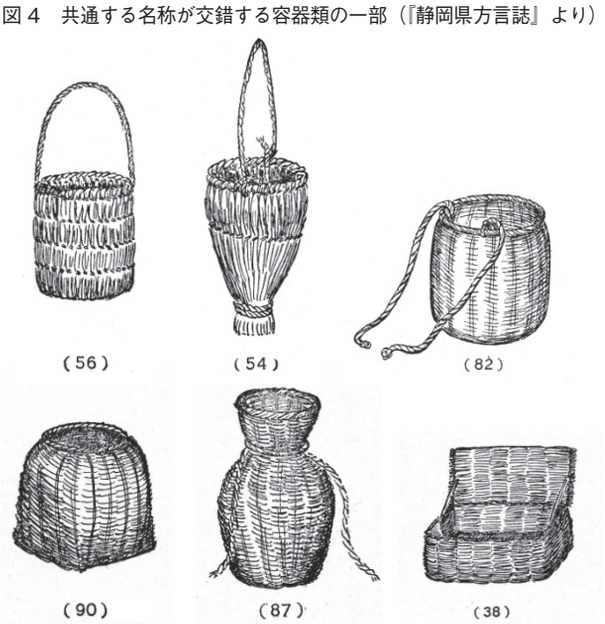
容器の方言分布表

○ ビク系　● モッコ系
□ ボーラ系　■ ヒグツ系
△ イジコ系　▲ フゴ系

民具名＼郡名	浜名	引佐	磐田	周智	小笠	榛原	志太	安倍	庵原	富士	駿東	田方	賀茂
字数	40	11	41	14	44	16	28	12	14	22	26	29	23
担ぎ平俵	○^{9} △^{1}	○^{10} △^{2}	○^{23} ●^{1}	○^{9}△^{1} ●^{1}	○^{41} △^{9}	○^{10} △^{13}	△^{27}	△^{9}	△^{14}■^{1}	△^{9}	△^{7}	△^{2} ■^{1}	△^{2} ●^{1}
弁当入れ背負俵	○^{1}											■^{1}	
飯櫃入れ具	○^{1}△^{8}	○^{1}△^{2} ▲^{1}	○^{1}△^{1}	△^{1}	□^{1}○ △^{1}▲^{1}	○^{1}				△^{1}	△^{1}		
嬰児籠	△^{7}	○^{3} △^{8}	△^{1}	△^{2}	○^{5}△^{6} □^{1}	○^{1}△^{9}	△^{12}	△^{1}	△^{1}	△^{3}	△^{8}	△^{4}	△^{1}
塩入れ具 (一)		○^{1}		○^{1}	○^{10}	○^{13}△^{1}	○^{12}△^{2}	○^{2}	○^{6}	□^{1}○^{3}		○^{1}	
塩入れ具 (三)	○^{1}		○^{4}	○^{2}	□^{1}○^{7}	○^{3}	○^{8}△^{1}	○^{2}	○^{4}	□^{1}○^{7}	○^{2}		○^{1}
塩入れ具 (四)	□^{14}○^{4}	□^{5}	□^{7}	□^{4}○^{1}	○^{1}	○^{3}	○^{16}	○^{5}	○^{2}	○^{3}	○^{3}	○^{2}	
塩入れ具 (六)	□^{1}○^{1}		○^{2}		□^{1}○^{2}		○^{1}		○^{1}	○^{13}	○^{9}	○^{9}	○^{4}
塩入れ具 (九)						○^{1}	○^{1}				○^{1}	○^{1}	
背負籠			□^{1}	□^{1}	○^{1}	○^{2}	○^{2}	○^{2}			□^{2}○^{5}	□^{6}	
腰籠	□^{23}	□^{10}	□^{12}○	□^{3}○^{4}	□^{7}○^{8}	□^{7}○^{8}	□^{8}○^{24}	○^{9}	○^{12}	○^{8}	○^{20}	○^{9}	○^{9}
種子入れ手提籠							○^{2}	○^{1}					
魚入れ腰籠	○^{3} ▲^{1}	□^{3}○^{3} ▲^{3}	○^{2}	□^{5}○^{4}	□^{1}○^{14}	○^{3}▲^{1}	○^{14}	○^{4}	○^{2}	○^{14}	○^{12}	○^{15}	○^{7}
肩掛籠	□^{1}						○^{4}	○^{1}	○^{4}	○^{5}	○^{3}	○^{3}	
運搬用担ぎ籠 (一)	□^{6}	□^{5}	□^{4}	□^{5}	□^{3}	□^{1}		○^{1}					
運搬用担ぎ籠 (二)	□^{2}	□^{1}	□^{1}		□^{3}	□^{10}	□^{5}	○^{1}					
運搬用担ぎ籠 (三)	□^{3}				□^{16}○	□^{4}○^{1}	□○	○^{1}	○^{11}				
運搬用担ぎ籠 (四)						□^{2}							
運搬用担ぎ籠 (五)					□^{1}	□^{3}							
運搬用担ぎ籠 (六)			●^{1}		○^{1}●^{2}	●^{6}							
肥料運搬具 (四)		●^{10}	●^{6}	●^{8}	●^{28}	●^{10}	●^{8}	●^{6}	●^{6}	●^{13}	●^{5}		
肥料運搬具 (五)			●^{3}		●^{22}	●^{4}							●^{1}
肥料運搬具 (六)	●^{7}	●^{2}		●^{1}		●^{1}		●^{3}	●^{1}	●^{6}	●^{18}	●^{12}	●^{4}
肥料運搬具 (十)											●^{4}		
肥料運搬具 (六)												▲^{1}	
馬の口籠						●^{1}	●^{3}			●^{12}	■^{2}	■^{1}	

（内田武志『静岡県方言誌』民具篇　551 頁：表の記号に付く小さな数字は「字」単位の使用例数、地名は静岡県 13 の郡名）

図４　共通する名称が交錯する容器類の一部（『静岡県方言誌』より）



このように設定した「担ぎ平俵」には次の６つの系統（すなわちビク系・ボーラ系・イジコ系・モッコ系・フゴ系、ヒグツ系）の方言名があり、それぞれ地域的な分布状況に特徴がみられることも示されている。

さらに、内田氏が注目したのは「担ぎ平俵」だけでなく、静岡県内のさまざまな容器の呼称に、カゴやザルを別にして、上記の「ビク系、ボーラ系、イジコ系、モッコ系、ヒグツ系、フゴ系」の６系の語が用いられている。具体的には「弁当入れ、飯櫃入れ、嬰児籠、塩入れ具（５形態）、背負籠、腰籠、種入れ手提げ籠、魚入れ腰籠、肩掛け籠、運搬用担ぎ籠（６形態）、肥料運搬具（５形態）、馬の口籠」などに種類と呼称とが実に複雑に交錯しながら用いられている状況が明らかにされているのだ。こうなると内田氏の指摘のとおり、民具の種類（実態）を説明するのに、上記６系統の方言名をそのまま使うことが不適切であることが一目了然となる。

それでも、目に見える民具を対象にしているので、このような呼称の交錯が複雑におきていることが理解できる。民具ならば、目に見える形態や素材と使用法、使用場所などから種類をある程度客観的に特定できるという有利さがあるが、それでも呼称のあり方には用心してかからないといけないことがよくわかる。しかも、このような民具の実態「形態と機能の組み合わせ」と呼称の複雑な交錯状態が、一つの地方（県レベル）でも起きていて、その基本単位は、字（いわゆる部落）単位であることを内田は示している。

こうなると、県のレベルでも、ひとつの呼称だけを特定の民具の名称として選ぶことはなかなか厳しく、場合によってはその後の比較をするときの誤解のもとになる可能性も秘めていることに注意をはらわなければならない。方言名を使うことの危うさに注意を払うことと、学術用語として新たな造語が有効な場合もあることを考慮にいれる必要があるだろう。

海外の民具への適用

異なる民族、異なる言語を用いる人々の生活を支えてきた民具について、共通する一覧表ができるとしたら、どのように共通概念を示すことができるだろうか。今回は、今後の展開のために、日本の地域の民具一覧に加えて、海外の民具の一例としてイランと韓国の民具リストを試みた。

日常生活の中で、食事をしたり、衣類をまとい、住まいを構え、自然に働きかけて食糧や資材を求めたりする暮らしの基本的な行動を考えれば、海外の暮らしを支えた民具を分類するときにも、日本で用いている「分野別分類」の適用が可能だと思われる。

自然環境や歴史的な蓄積、宗教や慣習の違いがあっても、下位の分類には自由度があるので、たとえば、日本に無いような生業の項目があれば、生産・生業の大分類の下に項目を増やせばよい。

韓国の民具リストの試み

韓国の民具表は、生活用具や農具に関する事典や博物館図

録に基づいて民具のリストを作成し、それらのテキストを要約して紹介する方法をとった。日本の文化に隣接している韓国文化ではあるが、民具の名称も直訳しにくい例があり、解説にも書いておいたように、日本の民具に相当するように思える民具（たとえば日本の飯茶碗と韓国のサバルなど）でも、形態と機能の概念にズレがあって、日本語で類似する民具名を当ててしまうことは、かえって誤解を招く怖れがあることを意識せざるを得ないものが多くあった。従って、日本語欄をあえて空欄にしておいた。

イランの民具リストの試み

日本とは生活環境が極端に異なるイランの民具を紹介した後藤晃さんの報告は、民具の名称を国際的に考える場合のヒントをいろいろ提供してくれている。

ここでも、「熊手」のように日本語への直訳ができた民具もあるが、「名称」欄への記述に苦心のあとがみられる。たとえば「……する棒」とか「……する器」などとしか書き様がないと思われる名称が散見される。これを見てハタと気付いたのは、むしろ、この方式でいくのが正解ではないかということであった。日本の民具に相当する名称が表記されていると、一見、わかりよいと表になっていると思えるが、むしろ日本語のイメージに影響されて誤解を助長する場合がある。形態と機能の最低限の共通性を示す短い文章が民具の図とともに示されるだけでも、所期の目的は果たせるのではないか。「民具名一覧」が「基本民具一覧」として確立されるまで、名称欄は当面は「検索タグ」として補完的な役目を果たす存在と考えておきたい。

イランの資料参考に、国際的な比較に耐える最低限の解説の表記方法の具体例を示しておく。

……

「時間を計る道具（フィンジャーン）」イラン
説明：「時間を水で計る器」（日本名では水時計・漏刻）
用途：灌漑のための給水時間を計る
形態と用法：底に穴のある小さな器を大きな水を盛った器に入れて浸み出す水量で時間を判断する

「脱穀用の厚板（ヴァール）」
説明：「脱穀用の厚板」
用途：脱穀用の農具
形態と用法：底面に鋭利な小石の破片をたくさん埋めてある。これに人が乗り、家畜に曳かせる。

……

今回の日本全国版の「民具名一覧」は、日本語が通じる日本の国内だからこそ、名称に伴う共通のイメージに助けられて成り立っている部分があり、このまま翻訳版を作っても、国際的には通用しないものになってしまう可能性が高い。

そこで、全国版の日本の民具名一覧も、今後、民俗的世界において「外国人」「異星人」に近い若い年齢層にも共感が得られるようなものにするためにも、海外向けとして通用する、項目の立て方、説明の仕方の工夫を加えて改良していく必要があることを表明しておきたい。

「何をどうするもの」であるか、つまり「基本機能」と、「基本形態」（たとえば「箱」であるとか「袋」であるとかいう、その言語で表わされる基本的な形態要素）をからの説明を示し、その民具に独特のあり方に言及するような解説を実現することを考えたい。調査地ではまずはそこで出会った民具の解説をすることになるだろう。そして、いずれは「典型例」を示すことができるとよい。

国際比較が可能な民具一覧表に

海外の民具についても、日本における「分野別分類」が適用できることをすでに述べたが、「衣」・「食」・「住」・「農耕」・「漁撈」などの大分類の下位に、直接個別の民具名（今回の場合は日本語の民具名）を列挙するのではなく、ここにもうひとつ階層を設けて、国際的に通用する分類を用意する工夫が必要だと思う。たとえば「食」（食事に用いる器具）の下位に今回の民具名一覧表では「飯茶碗」とか「包丁」などが並ぶが、国際版では、これらの名前を直訳した単語を用意することは適切ではない。

国や民族が異なっても、衣・食・住、すなわち食べる生活、着る生活、住まう生活や、生産・生業、すなわち穀物の栽培、動物の捕獲、魚介の採集などの大分類の下には、日本の民具名のリストを無理やり翻訳して類例を求めるのではなく、分野ごとに、たとえば「穀物を選別する容器」「種を播くときの穴を掘る棒」「紡いだ糸を巻く枠」などと、今回イランの民具の事例で示したように、基本的な「用途と働き（機能）」、それに典型的な「形態」を簡明に説明した文章を図とともに示せば、それが標題の役目も果たしてくれる。名称はそれぞれの言語を、直訳せずに示す。こうすることで国際的に比較が可能な民具リストに整備していける可能性があるのではないだろうか。

出土資料の同定

少し視点が変わるが、民具の形態分類と形態検索の手法が確立されると、考古学の発掘調査で出土した資料についても、形態から用途を同定する作業に貢献できる可能性が高まると考えている。古い例で恐縮だが、かつて筆者は静岡県の伊場遺跡から発掘された「有樋十字形木製品」として紹介されていた出土品を民具の視点から解明する試みをした（「四手網考～伊場遺跡出土の有樋十字形木製品をめぐって～」『物質文化』41号1983年、物質文化研究会）。

丁寧に加工された十文字の木製品のグラビア写真に引き付けられ、これが何であるか、ぜひ正体を突き止めてみたいという謎解きの意欲に駆られたのだ。十字形の民具にどんなモノがあるか。またこの木製品に刻まれた溝がどのような役割を果たしているのか。さらに別の部品が加わる可能性も考えて全体像を想像し、形態情報から考えうる用途を想定すると、漁具の四手網の部品の存在が思い浮かんだ。この部品が

あれば、四手網の四本の竿を中央で固定するジョイントになるはずだという予測を立てたのである。この仮説を思い浮かべた段階では、筆者自身は「四手網」の実態には全く無縁だったので、まず四手網がありそうな地方の風景写真集や浮世絵などの絵画資料を探っているうちに、東京湾の佃島や諏訪湖や琵琶湖の四手網に、それらしい部品がついていることに気付き、それぞれの現地を訪ねて実物に触れてみると、なんと出土品と瓜二つのものを発見することができたのであった。

このような探究も、もし各地で収集された漁具の形態情報が整理されていれば、その中から「十字形の民具」「十字形の木製品」の類例を検索することで、より効率的に実態に迫ることができたのではないか。たとえば「先端に鉤状の金物がついた棒」「格子状の蓋が付いた箱」などのあらゆる形態情報と、「土を掘る」「穀類を選別する」など「用途・機能」の情報を組み合わせた類型が既存の民具により蓄積されていれば、日本各地だけでなく世界各地の民具一覧表からそれらしいものに行きつくことができる可能性が高まるのではないか。

図５　伊場遺跡出土有樋十字型木製品（伊場遺跡発掘調査報告書　1978 向坂ほか）

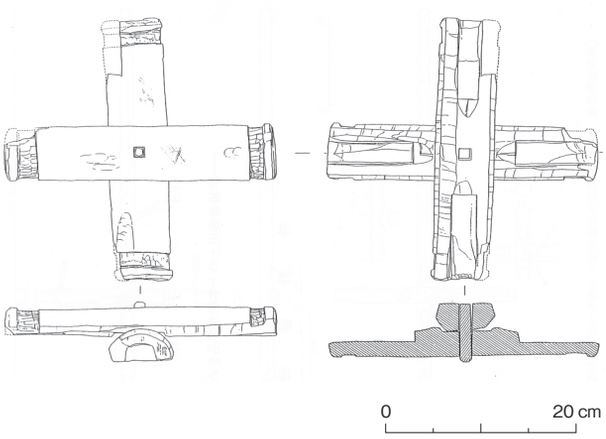
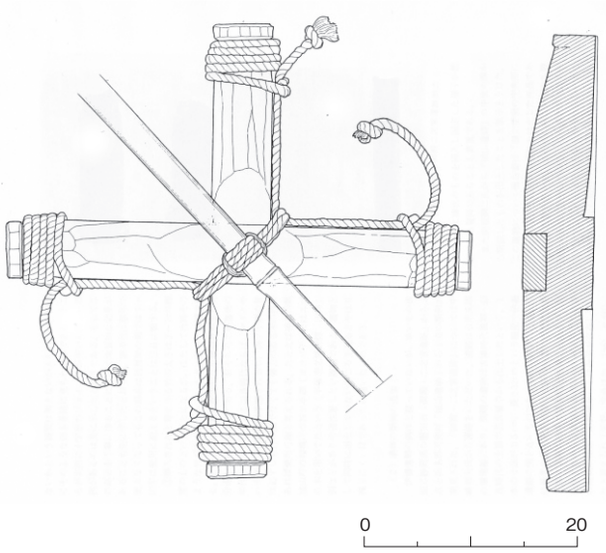


図６　琵琶湖の四手網の「クモデ」（ジョイント部）　神野原図



郷土資料室の民具の再生

日本各地には、膨大な民具が博物館資料として集積されている。そればかりでなく小中学校の空き教室などに集められているものがある。高度経済成長期に使われなくなり、郷土学習の教材などとして、PTA などの活動によって集められた民具が集積された。しかし、博物館のような保存の手立てがとられず、聞き取り情報などもないままに、教員たちも若い世代にかわって、残念ながら埃をかぶったままになっているものが多くなった。たまたま保存されている民具が、全国的には非常に貴重なモノである場合があっても、それに気付く手立てが無く放置されている可能性がある。やがては単なる粗大ゴミとして廃棄される運命にあるように思えてならない。このような民具も、用途や名称などが形態から検索できる手立てがあれば、教材として命を取り戻せる可能性があるのではないか。

基本民具のリストと形態検索の実現へ

幸い、本プロジェクトを通して、民具名一覧、そして地域呼称のリスト提示が叶った。それぞれがすぐれたコレクションから抽出されたものなので、日本の「基本民具一覧」に成長していける可能性を持っている。そして、典型として示された民具の項目に、それぞれ形態と機能の情報を丁寧に付加したものが蓄積されていくと、民具の形態別検索も可能になるのではないかと考えている。

分野別の分類が持っている欠点、つまり、形態と機能の類似した民具が分散しているとか、用途の分からない民具を見出すことが難しいという点も克服されて、民具をそれぞれの国ごとの造形文化の中で位置付ける手法になるのではないかと考えられる。この考えも具体的に活用例を示さなければ、説得力はない。なるほど便利だといえるものをぜひ提示したい。実現すれば、すでに伝承が途切れて、モノだけが残っていたり、収集時の情報が欠けた状態になっていたりする収蔵資料も、位置づけができる可能性が高まるはずだ。

あまり触れる機会のない海外の諸民族の民具や、ある時代には一般的だったモノがすでに忘れられてしまった場合なども、この形態からの類推と、各地の民具の蓄積から類推する追及方法が生きてくる。

これから民具に関心を持つ世代や海外の人たちが日本文化を理解する手段としても、目の前にある民具から、具体的な暮らしのあり方の実像に迫っていける手法が確立されることが望まれるのである。そのために、本プロジェクトで明らかにできたことを展開させたいと思う。ぜひ、既存のすぐれたコレクションの情報公開をうながして地域ごとに分野別の「標準民具」を明らかにし、その蓄積を充実させて、海外との比較研究のためにも有効な、充実した「基本民具」のリスト化が実現できることが望まれる。

世界の人々がお互いの文化を理解する有力な手段を提供し、これからも若い世代が、民具に関する魅力ある成果を発信できる環境を整えたいと念願するものである。